卓　　話

平成 18 年 4 月 11 日

「今、美術館は・・」

岐阜県美術館
館長　古川秀昭様

お世話になっています。岐阜県美術館の古川です。岐阜中ロータリークラブには、以前お伺いして、ニューヨークで「おりべ展」を実施していた時期でしたので、「おりべのゆがみ」についてお話しさせていただきました。今回 2 回目で「今、美術館は・・」というテーマでお話しします。

さて今、全国の県の財政が大変厳しくて、県立美術館は予算的に大変苦労をしております。例えば島根県美術館はサントリー美術館に売却されましたし、長崎県美術館は、完成してすぐに民間企業に運営させる「指定管理者制度」の導入になってしまいました。

岐阜県美術館の年間予算はどのくらいかご存じですか。約 2 億 5,000 万円程度です。年間来場者数が約 20 万人ですので、来館者一人当たり 1,200 円程度のサービスを提供していることになります。この数字は全国の公立美術館の中ではたいへん良い数字で、効率が悪いところでは一人当たり 6,000 円の美術館もあると聞いています。

所蔵作品は何点ぐらいあると思いますか。3,000 点あります。このうち 1,800 点が寄贈されたもので、最近では「熊谷守一」さんのご遺族からも寄贈いただきました。また岐阜県外の方からも「岐阜県出身の荒川豊蔵の作品が岐阜県美術館に少ないのはいかにも寂しい」といって、約 50 点の億を越す評価のご寄贈をいただきました。本当にありがたい次第です。美術館オープン時に寄贈していただいた「オーギュスト・ルノワールの『泉』」は今では 20 数億円とも言われています。このように岐阜県美術館は、語呂合わせではありませんが、いい意味での「寄付美術館」あるいは「ギフ(ト)美術館」とも言えるかもしれません。

当美術館は来年で開館 25 周年を迎えますが、この間に作品購入にあてた金額が約 30 数億円です。また、この間の総経費を約 60 億円とすれば、合計すると 90 億円の税金支出になります。ところが所蔵の 3,000 点の評価額は、たぶん 100 億円近い価値があると思っています。ですから岐阜県美術館は県民の財産形成に貢献しつつある、といえるのではないでしょうか。もちろん美術館の存在意義はこのような数値では表せない 5 年後、10 年後の県民の文化的財産づくりであることはいうまでもありません。

今後とも地域の皆さんに親しまれる美術館として充実させてまいりますので、ご支援のほどお願い申し上げまして、講演を終わらさせていただきます。

ありがとうございました。